

平成 22 年度

北嶺中学校入学試験問題

国 語

(注意)

- 1 問題用紙が配られても、「はじめ」の合図があるまでは、中を開かないでください。
- 2 問題は全部で **5 枚** で、解答用紙は 1 枚です。「はじめ」の合図があったら、まず、ページ数を確認してからはじめてください。もし、ページがぬけていたり、印刷されていない場合、静かに手をあげて先生に伝えてください。
- 3 答えはすべて解答用紙の指定された解答らんを書いてください。
- 4 字数が指定されている場合には、特に指示のないかぎり句読点も数えてください。
- 5 質問があったり、用事ができた場合には、だまって手をあげて先生に伝えてください。ただし、問題の考え方や、言葉の意味・読み方などについての質問には答えられませんので注意してください。
- 6 「おわり」の合図で鉛筆をおき、先生が解答用紙を集め終わるまで、静かに待っていてください。

〔一〕東京から大阪に引越してきた兄と「ぼく」は、亡くなった父が買ってくれた望遠鏡を持ち、高台へ天体観測に出かける――。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

それがぼくと星との出会いだった。そういえば、あの夜、母は何をしていたんだろう。今はあの時とは違う。

父と兄にいくつもの星座の名前を教わったし、銀河宇宙の大きさも知っている。望遠鏡だって兄がいなければ、自分ひとりでは使えないと思う。今日だって、おうし座流星群を見に来たのだ。

二人で望遠鏡をかついで斜面を登る。一〇分も登ると、昨日の雨で濡ったカヤが足にまとわりつき、露がくつ下をつき抜け、足の指の間でうずくまった。

頂上に着く。兄が望遠鏡を組み立て、スバルに合わせ始めた。

ぼくは、『季節の星座』という本を開いた。懐中電灯をつける。おうし座の肩にあるスバルは今の季節は東の空にあると書いてあった。

おうし座を探す。

スバルはすぐに見つかったが、角にあたる星が天の川にひっかかってわかりにくい。

空に線を引いたつもりで探す。なぜ昔の人は牛だとか、蛇だとか思いついたのだろう。そんな風に見えたことはないし、星を線で結んでも形にはならない。角の星が見えないなら今夜はA座にしたっていいだろう。

「見えたぞ」

兄がスバルをつかまえたらしい。「ホラ」といつてかわってくれる。

「B」

「C」

目で見ると、スバルは六個ぐらい見える。この望遠鏡を使えば、二〇個ぐらいは見えるはずだ。

「兄ちゃん」

思わず、望遠鏡から目を離さず大きな声を出した。

流星だった。兄が、だまりこくったまま地面にしゃがんで空を見上げている。

天の頂上あたりにカシオペアがあった。じつと見てみると、Wが見えてくる。そして、体重がふうっと消えていくように感じる。宇宙に二人だけが取り残されたようで急に不安になる。

不意に転校した学校のことを思い出した。東京から来たこと。言葉がちがうこと。なにかというと「東京」とバカにされる。ぼくのが学校のヤツらはなんでも気に入らないらしい。

「D」

兄が出し抜けに訊いた。

「E」といおうとしたが、急に訊かれたのでノドが詰まってなかなかいえない。なぜだか涙が出てきた。

「F」

兄が重ねて訊いてくる。

鼻をグスグススンいわせながら、それでもなんとか「違う、違う」というと、よけい涙が出てきた。

「そのうち、友だち、出来るよ。仲間に入ろうとしなきゃ、だめだよ。誰か気の合いそうなヤツいないのか。星を見るのが好きなヤツとか。①この望遠鏡、学校に持って行っていいよ。友だちに見せてやって、お前の知っている星の話、してやれよ。オレは、三年になったら天文部の部長になれっていわれてんだ」

兄が笑いながらいった。

「天文部の部長！すごいよ、兄ちゃん」

涙がとまった。

「もうすぐ、シリウスの季節だなあ」

兄が東の空を見る。

「シリウス、うん」

「来月になるとシリウスが東の空に顔を出す。砂漠のアラビア人はシリウスを『千の色の星』とも呼ぶんだ。見ている間に、青、白、

緑、紫とプリズムみたいに色を変えるから」

「シリウスって一番明るい星だよね」

「そうさ、でも、直径は太陽の二倍しかない。地球からの距離が八・六光年で、日本から見える恒星では最もGから明るく見える

んだ」

兄の力強い話し方はまるで死んだ父そっくりだ。

「八・六光年かあ」

八年前といえ、父がまだ生きていたころだ。その時シリウスを出発した光がもうすぐ地球に届く。②宇宙は巨大なアルバムだ。ぼくらは宇宙の隅つこに取り残されているわけじゃない。ぼくは「勇氣」を取りもどした。

(ピートたけし『少年』より)

問一 空欄 A には三字で、G には二字であてはまる言葉を答えなさい。

問二 ——— ①「この望遠鏡、学校に持って行っていいよ」とありますが、なぜこのようなことを言ったと考えられますか。三十字以内で書きなさい。

問三 「B」Fには「ぼく」と「兄」の会話が入ります。それぞれの「」にあてはまる会話文を次のア～オの中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 「俊夫、学校に友だちが出来たか？」

イ 「いくつ見える？」

ウ 「いじめられているのか？」

エ 「うん」

オ 「一つ、二つ、三つ。うーん一五ぐらいかな」

問四 ——— ②「宇宙は巨大なアルバムだ」とありますが、主人公はどのような点から「巨大な」と言っていると考えられますか。わかりやすく書きなさい。

③ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

話は、七年前の夏にさかのぼる。その頃私は、午前中は読書に過し、午後は、ローマの街に散在する遺跡や美術館を見て歩くという毎日を送っていた。その日も、当時借りていた市の中心にある私のアパートからは歩いて行ける、ローマ国立美術館の中で、午後を過すつもりでいた。

ヴェネト通りを下り、ピソラーティ通りを上ってしばらく行くと、エセドラの噴水のある広場に出る。昼食を終えたばかりのこの時刻は、南欧特有の習慣である午睡の時間にあたるので、街路にも広場にも人影はほとんど見えない。店もシャッターを降ろしてしまう。こうして、一時から四時半頃まで、ローマでは町中が眠りに落ちる。道を歩いているのは、午睡の習慣を持たない外国人旅行者くらい。時折、自動車が猛スピードで通り過ぎていく。

エセドラの噴水は、人も車もない広場に、高々と水のしぶきを上げています。客を待つ観光用の馬車も、広場のはしの木陰に寄り、馬はただ黙々とかいば袋に鼻をつっこみ、馭者の方は、客席で眠りこんでいる。

噴水のわきを通り、はるか正面に終着駅の白い建物を見ながら左手にまわると、古代ローマ帝国皇帝ディオクレティアヌスの浴場跡の入口だ。ローマ国立美術館は、この中にある。

入口で、これまた眠りこんでいる(あ)ジュエイを起して切符を買って中に入ると、強烈な陽光にさらされてきた肌が急に冷水を浴びせかけられたような、ひんやりとした冷気につつまれる。かつては大理石によって装われていた壁面は、今ではそれがはがれ、かつ色のレンガがむき出しになっているが、それでも、部厚いレンガの壁と天井は、夏のローマの陽光をさえぎるに充分なのである。しかし、何度もここを(い)オトズれている私は、とどころに立つ石像やモザイクの床面には足を止めず、まっすぐに目的の場所へ急ぐ。館内に入っても、右手にある陳列室の前は素通りだ。そこにあるヘレニズムやローマ時代の彫刻は、後で見ればよい。そのまま、中庭へ出る。中庭をめぐる回廊の一隅に置かれてある古代ギリシア時代の浮彫りが、私のお気に入りだからだ。陳列室にも人影は見えなかったが、中庭にも誰もいる気配がない。ローマでは最も静かなこの時刻に、誰の邪魔もなく、私のヴィーナスとひとときを過せることに満足して、私はそこに近づいた。

ところが、誰もいないかと思っていたその場所に、男が一人いたのである。彼は、濃い緑色のシャツの背中をこちらに向けて、私のヴィーナスの前にたたずんでいる。私は、今までの満足感を台無しにされた思いで、自分勝手な不機嫌さをもてあましながら、じつとその男

の背中をにらんでいた。何もこの時刻に、しかもよりによって私のお気に入り彫刻の前に、と思いつながら。

とその時、男も人の気配を感じたとみえてふり返った。その薄い肩とこわい黒髪とで、私は直感的に日本人だと思った。彼も、私を日本人と見たらしい。ごく自然に、私たちは黙礼をかわしたから。

どちらが先に話しかけたのかはおぼえていない。そして私たち二人の会話が、どんな話題からはじまったのかも、今では忘れてしまった。ただ私は、この四十歳近い、もの静かな日本の男と、「ルドヴィージのヴィーナス」と呼ばれている、紀元前五世紀に作られた、湯浴みするヴィーナスと彼女に奉仕している女神たちの薄い浮彫り彫刻を見ながら、中庭の回廊の石の柱によりかかって、午後のひとときを過ごしたのである。

彼は話した。二年前から、エジプトのアスワンハイダムの工事を指導するため、日本から派遣されて、エジプトに滞在していたこと。その間に一度だけ、家族に会うために日本へ帰ったこと。砂漠の中での仕事で、前から浅黒かった肌が、ますます黒くなってしまうこと。アラブ人を使う仕事はなかなか苦労が多かったが、それでも、海の波のようにうねる砂丘の向うにピラミッドを見た時は、やはりあれは三角形でなければならず、その形が最も美しく自然になつていのだと、感心して眺めてしまったこと。

彼は続けた。どうやら自分は、ダム工事という機械的な仕事をするためにエジプトに来たのだが、二年の滞在期間を過ぎてみると、知らず知らずのうちに、歴史や美術のような人間的なものに魅かれはじめたようだ。もちろん、二十年近くも続けてきたエンジニアの仕事は、自分にとっては何よりの世界だけれども、もうひとつ、別の世界も自分にはあるのだと思いはじめてきたのだ。

だから、カイロでの仕事が終わった今、すぐにでも日本へ帰れるのだが、自分は、このしばらくの休暇を、①自分の発見したもうひとつの世界のために捧げようとしたのだ。ヨーロッパ各地の美術館をまわり、ヨーロッパの歴史を味わいながら。

そしてローマが、カイロを発った自分にとっては最初のヨーロッパの(う)トシなのだ、といった。こうして、ヨーロッパを南からまわりはじめ、北のコペンハーゲンから日本に帰る。そこには、家族とつぎの仕事が待っているであろう。しかしそれまでは、この若者のような心ときめきを大切にしながら、一人で旅をしてみたいのだと。

彼の話聞きながら、②私の不機嫌さはいつのまにか消えていた。そのうえ、彼がカメラを持っていないことが、私の気に入った。この人は、写真をとって記念に残すことよりも、をより大切にしている人らしい、と感じたのだ。さらに、彼がローマで泊っているホテルの名を聞いた時、③彼に対する私の好感情は決定的となった。そのホテルは、ローマでは最高級に属するホテルで、彼はそこに宿を取っている理由を、自分のやりたいことをするには、なるべく(え)カイテキな環境でやりたい、といったからである。人間は、金を貯える時よりも、金を使う時の方がより人間的になる、と常々私は思っている。

(塩野七生『イタリアからの手紙』より)

問一 ——— (あ) (え) のカタカナを、正しい漢字にあらためなさい。

問二 ——— にあてはまる表現を、十字以上十五字以内で考えて答えなさい。

問三 ——— ①「自分の発見したもうひとつの世界」とは、どのような世界ですか。本文中の言葉を用いて、二十字以内で具体的に説明しなさい。

問四 ——— ②「私の不機嫌さ」とは、何に対する不機嫌さですか。六十字以内で説明しなさい。

問五 ——— ③「彼に対する私の好感情は決定的となった」とありますが、それはなぜですか。次のア～エより、最もふさわしいものを選んで記号で答えなさい。

ア 自分のやりたいことにそれだけの時間やお金をかける人なら、きっと仕事に対しても、高い理想と情熱をもっているに違いないと考えたから。

イ 仕事をして得たお金を、仕事以外のことや自分ひとりの時間のために惜しまずに使う姿勢に、この男性のもつ、人間としての豊かさを感じたから。

ウ 異国での仕事を終えても、すぐには日本へ戻らず、しばらく一人旅をしているこの男性を、若者のような好奇心と行動力の持ち主だと感じたから。

エ 自分も気に入っている素晴らしいホテルに宿を取っていると聞いて、美術の趣味だけでなく、さまざまな点で好みが似ていると確信したから。

☐ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

*1 DNA研究はつい最近発展してきただけに、まだ何をもちたらずのかわからない、未知の点があまりに多い。今後のDNA研究

の進展の行き着く先に、何が待っているのだろうか。われわれが懸念すべき点があるとすれば、それは何だろうか。

最も懸念すべきは、①*₂ゲノムDNAを思うように変える技術の完成であろう。あるいは、その結果もたらされるもの、と言い換えてもよい。

ゲノムDNA自体を変える技術は、本来、生まれつきDNAに欠陥のある不幸な人たちを根本的に治療する方法として開発されてきた。本人には何の落ち度もないのに、DNAにたまたま傷があるために深刻な病気を持つてこの世に生まれてきた人たちを、母親の胎内たんだいにいるうちに治せれば、これに勝る人道的な治療はなからう。現在すでに実験動物で一部成功しているように、受精した直後の細胞を子宮から取り出し、欠陥のある遺伝子を正常なものに置き換え、もう一度子宮に戻すだけでいいのだ。傷が癒されたDNAが子々孫々にまで受け継がれるこの究極の遺伝子治療を、遺伝病を持つた不幸な人々を救う目的で用いることに、反対する人はまずいないだろう。

しかし、この世知辛く抜け目ない世の中では、同じ技術が他の目的のために使われるであろうことも目に見えている。ここしばらく実現しないにしろ、遺伝病の治療と技術的にはまったく同じ方法で、背の高さ、筋力、持久力といった身体的能力のみならず、知的能力までも変え得るからである。このための新たな技術の開発は必要ないだろう。必要なのは、知的、身体的能力に関する遺伝子を見つけて出すことだけである。

現在のDNA研究のスピードを考えると、②こうしたことを空想ごとく笑ってすますわけにはいくまい。遺伝子はいずれ間違いなく見つけ出されるだろう。現に、DNAを変えることで学習能力が明らかに高まったマウスが、数年前に作られているのだ。このマウスに施したのと同じような操作をヒトに施すのは、理論的には現在でも可能だ。

DNAの*₃恣意的操作は、新しくよみがえった*₄優生論である。二メートル以上の長身のバスケットボール選手や、特別に腕の筋肉が発達したボクシング選手を作ることにも不可能ではないだろうし、特別な頭脳を持つた人間を誕生させることも、今や単に未来小説のテーマではない。しかも、遺伝子操作によって優秀な遺伝子が子々孫々まで受け継がれるのである。

③この新しい優生論は、今までの優生論とは違ったものである。かつての優生論は法律で強制される国家レベルのものであった。新しい優生論は個人レベルのものである。

この優生論においては、過去そうしたように劣悪な遺伝子を持つた人を断種によって社会から除いたりしない。その逆である。すなわち、より良い遺伝子を自分や家族のゲノムDNAの中に入れ、知的・身体的能力が優れた人を作っていく。国はおそらくいっさい関与せず、個人の自由によって行われることになる。たとえば、何かの面でわが子の能力が劣っているとわかったとき、DNA操作をしてでも何とか良くしてやりたいといった気持ちを持つたのは、ほとんどの親の本能といってもいいのだから。

このように子どものDNAを変えることを親が計画した場合、社会がそれを法的に止めさせることができるのだろうか。現に、今でも金さえあれば、整形手術によって顔や体つきを変えることができる。もちろん合法であり、一般化させている。とすると、たとえばゲノムDNAを変える美容整形を行ったとして、今までの美容整形とどう違うというのだろうか。

いずれわれわれは、個人の自由と社会へ及ぼす影響との間に、一線を引かねばならなくなるだろう。そして、それをどこに引くのかについては、当然社会的な*₅コンセンサスが求められることになるだろう。しかしそのコンセンサスは、果たして今までわれわれが持っていた道徳や社会通念から導き出し得るものだろうか。

問題はそれにとどまるまい。

たとえば、遺伝子操作で優れた遺伝子を持つ子供を作るには、莫大なお金が必要だろうから、金持ちのみがそのような子孫を作れるようになるだろう。多くの人たちはその機会を持たないから、結果として、一部の人たちのみが優れた遺伝子のおかげで富をますます増やす。金持ちが息子の出来の悪さを嘆いたりすることがなくなり、社会における持てる者と持てない者の格差はますます広がる。これはまさにDNAによる社会の階層化である。

さらに、④その先がある。

現在、家畜の品種改良のために競って開発中のクローン技術と、遺伝子組み換え技術が融合することが容易に想像されるのである。クローン人間が失敗なくできる技術が獲得され、その実行が法的に認められたら、ある特別のゲノムDNAを持った人間とその一族が、自らの分身を何回も地球上に登場させることができ、しかもその数を理論的には無限に増やせるようになる。

クローン技術が実行される社会では、優秀な人間はクローン複製されるから、遺伝子操作のみの社会よりもより強固に能力が家系の中に固定されることになる。その結果、普通の人間がいくら本人の努力で生活を向上させようとしてもできなくなる。すなわち遺伝子操作による階層化どころか、階層間の流動性が否定され、DNAの差、しかも人為的に作られた差にもとづく固定された⑤二つの階級が誕生する。奴隷制度の復活でもある。

それは当然社会を不安定にする要因になるだろう。有史以来、人間社会を支えてきた根本原理の崩壊である。これは大量殺戮兵器による、すなわち外的な力による人間社会の破壊ではなく、内からの崩壊である。

このようなDNA研究の進展による人間社会の内なる崩壊は、いまだ現実化していないが、遅くともあと半世紀以内に、早ければ一〇年以内に、差し迫った課題として浮上するのは間違いない。われわれに必要なのは、問題に目をつぶり、希望的観測で議論を回避す

ることではなく、人類が直面するおそらく有史以来最も深刻な事態に、科学的な認識を持って正面から立ち向かうことだろう。

(大石道夫の文章より)

【語注】

*₁ DNA: 遺伝子 (遺伝される性質を決めるもの) の本体である物質。

*₂ ゲノム DNA: ひとつの生物すべての遺伝情報を含む DNA のこと。

*₃ 恣意的: 自分の好きなようにふるまって、ということ。

*₄ 優生論: 十九世紀後半、イギリスのゴルドンが提唱した優生学から始められた人種改良思想。

*₅ コンセンサス: 合意・賛同。

問一 ————— ① 「ゲノム DNA を思うように変える技術」は本来何を目的とするものなのか。二十五字以内で書きなさい。

問二 ————— ② 「こうしたこと」の指し示す内容をわかりやすく書きなさい。

問三 ————— ③ 「この新しい優生論は、今までの優生論とは違ったものである」とありますが、A 「新しい優生論」と B 「今までの優生論」について説明したものととして最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 「新しい優生論」とは、劣悪な遺伝子を除くことにより優れた人を残そうとするもので、国家が強制的に行うものである。
- イ 「新しい優生論」とは、優れた遺伝子を組み込むことで優れた人を作ろうとするもので、個人が自由に行うものである。
- ウ 「新しい優生論」とは、断種により劣悪な遺伝子を除くことを法律で強制するもので、優れた人を残そうとするものである。
- エ 「今までの優生論」とは、断種によって優秀な遺伝子を除いていこうとするもので、国家が法律によって強制したものである。
- オ 「今までの優生論」とは、優秀な遺伝子を組み込むことで優れた人を作ろうとするもので、個人が自由に行ったものである。
- カ 「今までの優生論」とは、断種によって劣悪な遺伝子を取り除いていこうとするもので、国家が強制的に実施したものである。

問四 ————— ④ 「その先」の内容をわかりやすく説明しなさい。

問五 ————— ⑤ 「二つの階級」を具体的に示している七字以内の語句をそれぞれ書き抜きなさい。